月刊誌『演劇と教育』六月号より

新刊…旧刊

教職入門の身体的実践的手引き――

川村史記・福島康＝著
晩成書房＝刊　定価＝二〇〇〇円＋税

『一点集中！表現展開』

表現力を育てるワークショップの実際

福田三津夫―本誌編集代表

本書は、福島康が帝京大学文学部教育学科の非常勤講師だった時に、教職課程の受講生を対象に二年間授業したものを、川村史記が文章化したものである。現在私自身も教育学部の非常勤講師ということで、興味深く読んだ。身動きがとれない教室で八十人の学生を日々相手にしている。私の最初の率直な感想としては、少人数の学生を相手に、身体表現が十分可能な空間を確保できるということに羨ましさを感じる。

さて、全十二回の講座のテーマ、実技は以下のようになっている。

1 オリエンテーション（自分自身の身体と心を知る、簡単な手遊び）
2 自分と向きあう（自画像を描く、柔軟度チェック）
3 母子遊びの重要性（他者との向きあい方、乳幼児期における母子遊びの重要性と遊びの演習）
4 保育および教育と遊び（集団で遊ぶのに便利なグループ作り）
5 手の運動の発達（手の表現と手遊び）
＊以上、表現を学習する準備体操。
以下、表現と指導のあり方を学ぶ。
6 表現と教育の関わり（教師の技術としての演劇的手法）
7 集中と作法（一点集中の方法と作法）
8 もうひとりの自分の発見（自分の身体を知る）
9 身体表現の基礎基本（心身の解放と課題に基づく身体表現）
10 想像から創造へ（エチュードの発展①）
11 観察から創造へ（エチュードの発展②いろいろな立ち姿、③いろいろな歩き方とエチュード、④動物の歩き方と人間彫刻）
12 ごっこ遊びから劇遊びへ（劇遊びの実践）

本書が教職入門の優れた実践的手引きだとする根拠はいくつもある。

まずは「人間存在を心と身体という二元論で認識するのではなく、心と身体は一体のものである」（19頁）という記述からもわかるように、この講座全般に通底しているのが〈からだ〉から出発しようという構えだ。かつて野口三千三氏に受講し「身体の柔軟度、脱力・腕の解放運動、尻たたき、身体の各部の回転等」はその影響を受けたものであると告白している。

さらに「福島方式表現指導」の根底に、共感できる現在の教育批判がある。「教育現場に様々な競争原理をもちこみ子ども達や教師を競わせて限定的領域の学科力さえ高めれば〝よい社会〟になるのでしょうか」（132頁）と問い、今まさに大切なのは、コミュニケーション、表現の教育だという。至極納得！

そして「起立！礼！」「おはようございます！」という儀礼的な挨拶を批判する記述に、〈表現〉を熟知する著者の揺るがない姿勢が反映されている。「教師が教室のドアを開けたら、自らが教室全体に『おはよう』と声をかけるようにします。」（59頁）具体的実践のヒントもさりげなく提示する。

教師を目指す学生の〈からだ〉の点検からスタートさせながら、具体的実践的な表現の方法まで幅広く言及されている本書は、教職入門書として、学生だけでなく現場の教師（指導者）にも大いに活用されていい本である。

6

6月の本棚

▼『劇づくりで育つ子どもたち』田川浩三・兵庫保問研編著　劇あそびとは別の意味をもつ劇づくりを、発達段階を踏まえて本書では5歳児に特化し、提案、推奨する。神戸親和女子大学教授などを務めた著者が、保育問題研究会の保育士たちと進めた実践と研究の一冊で、現場の疑問や悩みに具体的に答え、実践上のヒントにもなる。前著『ごっこ・劇あそび・劇づくりの楽しさ』とあわせて読むと、幼児期の表現活動の意義と必要性がなお説得力をもつ。なお、今号「編集だんわ室」で平井まどかが本書に触れている。（A5判一七四ページ、一八〇〇円＋税、かもがわ出版）

▼『09日本の人形劇』日本ウニマ編　国際人形劇連盟日本センターによる「日本人形劇年鑑2009年版」で特集はⅠ（ウニマ大会と記憶に残る人形劇）、Ⅱ（創立40年以上の劇団紹介）。Ⅰは、世界大会は4年ごとに開催されているが、1984年ドレスデン（東ドイツ）大会以降の参加記を日本ウニマ会長の杉田信博が執筆。Ⅱは、19劇団のうち13劇団の代表作とメッセージの紹介。シリーズⅠ（伝統人形芝居を訪ねて）は淡路人形浄瑠璃と庄内出羽人形芝居、Ⅱ（世界人形劇事情）は「カナダ編―ケベックを中心に」。ほかに、海外公演・海外交流の記録、出版物リストなど。（A5判一九六ページ、一五二四円＋税、晩成書房）

▼『演劇会議』132号／全日本リアリズム演劇会議編　杉本孝司（東京芸術座「演出の仕事　演出の出会い」、藤沢薫・河東けい・栗原省による鼎談「朗読のあり方を考える」。「追悼竹内敏晴先生」は畑野稔（日本演劇教育連盟全国委員）、「削られた心の栄養費「事業仕分け」にもの申す」は城谷護（全リ演事務局長）。ほかに全国各地の劇団からの近況報告など。戯曲は楠本幸男『幻想列車』。（B5判七六ページ、七〇〇円、全リ演事務局＝京浜協同劇団☎044―511―4951）

▼『だいころじい』第35巻／㈶浅野太鼓文化研究所編　〈太鼓と人間の研究情報紙〉と銘打ったビジュアルな一冊。特集は〈太鼓の歳時記〉。「つれづれにあそびせんとや囃子雛」保住敬子、「鬼太鼓の鬼がふりむく緑夜かな」（佐渡）神崎徳之介、「花散るや鼓あつかふ膝の上」（万部会／大阪）松本たかし、など俳句を織り交ぜ各地の四季の祭りを紹介する。小野美枝子編集長の対談は川田順造（文化人類学）。アフリカ・モシ族の「太鼓ことば」解読の経験を中心に語る。日比野克彦の連載エッセイは「エジプトの旅」。ほかに、各地の太鼓イベントの報告、イベント予定やワークショップ情報、新譜新刊情報など。（A4判一〇四ページ、一五〇〇円、㈶浅野太鼓文化研究所☎076―278―5170）